

## 一枚の棋譜

(津軽路から 日本言語の美学を考える)

仙台 川原 富

昭九会が設立されて 40 年余り、“総会”と称する集いを毎年行っています。当初の総会は アタリ・アタリ！の手談で喜んで居たコミュニケーション碁会でしたが、この年代をマスコミに「濡れ落ち葉」などと揶揄される様になってから この会の様相が急速に変化して、現在では大奥・腰元達が一年間のタイムラグを語り合う席を占める有様になっています。適時に発行されている 100 ページ前後の「文集」なるものも、“駆け抜けた昭和”に於けるグローバルな生活環境などに記述を変えて、既に 11 集を数えました。

今年の総会は

「終着駅に未来の課題を求めて」

と題し、ともすれば衰えがちの 体内五感機能 をリフレッシュすべく

「縄文遺跡（温故知新）・津軽三味線（悲しみを聞く）・ネブタ（心を視る）・八甲田山、奥入瀬溪流（自然美の体験）・酸ヶ湯温泉（300 年の古湯で癒す）」をコンセプトに取り入れてみました。

その情景を俳句に詠んでくれた会員に感謝ながら、改めてわが国の言語美学を考えさせられています。

30 年ほど前、ヨーロッパの言語文化に精通していたフランスの ド・ゴール大統領 は、日本の経済成長が華やかしかった頃に「食糧を自給できない国は 独立国 に値しない」とか、池田首相がフランスを訪問した際「トランジスタの売り込み人に会う・・・」などと日本を蔑視したともいえる発言をしていました。

時を経て 中曽根首相が訪問した際に「日本の政治家の嗜みの一つで私の句集です」と言って贈った一冊の内容に驚き、日本国全体の評価を改めた一とされています。

どこかのセンセイ方に知ってもらいたいですね・・・。

{序盤}

日本の短歌は、言葉の数を減らして“見えるものを表現して読み手の感性に委ねて見えない空間を感じさせる 言葉の芸術性文化”とされています。絵や歌舞伎等もそうでしょうし、又 藤沢秀行先生は「碁 は芸術だ」と謂われたのも 同義的な考えだったのでしょう。

浅春や 六栗柱の 櫓 立つ 古池 蛙水 (横須賀市・古池昭正さん)

縄文の 遺跡巡れば 露のとう 小川 玄良 (坂戸市 ・小川玄吾さん)

苔被ふ 日本一の 桜かな 古池 蛙水

津軽三味線 春ストーブの 置きてあり 古池 蛙水

じょんからの 三味線聴く 雪の岩木山 小川 玄良

白纏う 偲ぶか縄文 津軽富士 詠人 不語

「中盤」

残雪の 岩木山背に バス走る 古池 蛙水

津軽富士を背に 雪の回廊を登って八甲田山中にある 酸ヶ湯温泉 に辿り着くが、ここではもう 碁の対局で勝ち負けを競う雰囲気は とうに失っています。

この温泉は 昔から変わる事なく続いている 男女混浴 で知られ、この季節では例年 10 メートル程度の雪の屏風に囲まれていると言われ、外界は見えません。

闇に浮く 白き裸身の 山湯かな (名古屋市・北川弘蔵さんのメモから)

うず高く 雪残りあり 宿の庭 古池 蛙水

何処までも 春空青く 八甲田 古池 蛙水

雪の壁 北国の春 遠からじ 小川 玄良

「終盤」

宿前の 広場残雪 溶け流れ 古池 蛙水

春曇る 雪の回廊 下りけり 古池 蛙水

文学家としても知られる 大町 桂月 は  
「奥入瀬の溪流の幽静、天下無比なること 二也」  
と明治時代に書き

住まば日の本 遊ばば十和田 歩けあ奥入瀬三里半

と歌った奥入瀬川、雪解け水で趣を異にするも如何にせん残雪で観る場所が限定されて残念でした。

斜めたち 触れ合ふもあり 樹氷林 古池 蛙水

奥入瀬の 流れ清らか 雪解け水 小川 玄良

雪残る 奥入瀬滝の 飛沫けり 古池 蛙水

雪壁に 小枝突き出し 芽ふけり 古池 蛙水

「ヨセ勝負」

何だかんだと騒ぎながらそれぞれの想いで語る会員を乗せたバスは、9メートルにそそり立つ雪の回廊を無事に下り 総会の幕を閉じました。  
コンセプト にした成果も、それなりの一と思われませんが、九州・福岡から毎回飛行機で馳せ参じる 赤座さん、又 雑誌などに投稿するであろうと思われる縄文遺跡の説明をメモをする 名古屋・北川さん 他、「大丈夫！間違いなく老化してる様で心配ありません」などと変換ミスを交えてメールを寄こす多士済々の猛者たちを纏め続ける 立川市の 佐々木滋夫 さんにも頭が下がります。 私は喜寿を背にし

勝ちはもとより欣然、敗ぶるも又 喜ぶべし

などと自分に都合よく考えて、ともすれば回避がちな 未来志向 を強制化することで自分に課題を課し、「見えないものを見る感性」があるのか無いのか一、先人の棋譜から「どのような空間をデザインできるのかどうか・・・」並べて テスト してみようと考えています。

・・・オワリ・・・